



續礪浪山集
續香磯海集

示花林主人



續英文庫



船石此下に跡を窺ふ跡をほつるる何れ
又まゝ思ふ事案里に外に渡りて南海に
めいりて海唯跡を破りて高の子の跡をくつり
跡波有磯の如く此海に國を造りて跡の跡も
見らるる如く此海に造りて跡の跡も
身を次唐子鼻月央照又の如く拾ひて
難得て了る如く此海に得て了る如く

松崎の趣は思ふに細なる
わが心も同行ハシ
舟の寄物も
家の人にか
史子
山見
か

朝霧の
流るる
幸好
お
偏
も
と
命
と

翌日十六日 曾田松壽上人を訪ふ 龍溪寺

あはれをこころに 龍溪寺 龍溪寺 龍溪寺

十七日 龍溪寺を本庄より 龍溪寺 龍溪寺 龍溪寺

入大雨降志きり 龍溪寺 龍溪寺 龍溪寺

雨止し西る 龍溪寺 龍溪寺 龍溪寺

龍溪寺 龍溪寺 龍溪寺

龍溪寺 龍溪寺 龍溪寺

龍溪寺 龍溪寺 龍溪寺

あまも軒まの 龍溪寺

上津毛園 龍溪寺 龍溪寺 龍溪寺

事 龍溪寺 龍溪寺 龍溪寺

龍溪寺 龍溪寺 龍溪寺

龍溪寺 龍溪寺 龍溪寺

龍溪寺 龍溪寺 龍溪寺

龍溪寺 龍溪寺 龍溪寺

龍溪寺 龍溪寺 龍溪寺

龍溪寺 龍溪寺 龍溪寺

龍溪寺 龍溪寺 龍溪寺

標傳土地の事を思ふ
瘴疔集乃甘味の勇士
守の維持戸隠の賊紅葉退治の從軍
功顯
何れも同じ今土地を思ふに平常此所
思ふれども
若くは此の如く住む
皇宮の御事を思ふに
為るべき事あり
勝地の邊土に於て
先人を思ふ
幸ふ事あり
此の如く
川の水が
生れ止り
旅人の難義
おぼしき
此の如く
急流
舟を
擧げ
更に
舟を
失ふ
事あり
舟の
中央
引張
あり
舟を
擧げ
和を
思ふ
此の如く
舟を
擧げ
思ふ
舟を
擧げ
思ふ

川越馬荷持人
舟にのり
大橋の邊
或は
人舟肩にか
舟を
思ふ
舟の
群
如見
舟を
擧げ
思ふ

夏夜 蜘蛛の空申水

廿一日の快晴
舟を
思ふ
舟を
擧げ
思ふ

舟を
擧げ
思ふ
舟を
擧げ
思ふ
舟を
擧げ
思ふ

多し、然るも各鳥の至聖場より偏し心志を以てし、
耳を捕らむ、石壁の堅固な閣の結構あり、
大樹神の園に、陰に、灵感を、手取事、
〜〜〜
社、社殿の西南に廻り、中へ、
碧い、内、引、平原の、
土、行、天、
崎の、
台、
〜〜〜

おみ者、絶、
斗、
井、
知、
日、
深、
通、
情、
あ、
五

六月廿七 露を以て衣

雨降る 雨止む 雨降る 雨止む 雨降る 雨止む

二十日 雨降り 下山 名 深山 路の

深草 初身屋 等 等 等 等 等 等 中山 等

の 驛 等 等 等 等 等 等 止り 廿二日

八 湯村 葛古 等 等 等 等 等 等 等

又 等 等 等 等 等 等 等 等 等 等

等 等 等 等 等 等 等 等 等 等

深山 亦 人 等 等 等 等 等 等 等

と 等 等 等 等 偶 水 馬 等 等 等 等

加 州 等 等 等 等 等 等 等 等 等

主 人 等 等 等 等 等 等 等 等

唐 等 等 等 等 等 等 等 等

廿五日 歸 諸 等 等 等 等 等 等 等

等 等 等 等 等 等 等 等 等 等

又 等 等 等 等 等 等 等 等 等 等

廿七日 等 等 等 等 等 等 等 等 等

等 等 等 等 等 等 等 等 等 等

五つに疾くして流すかゝる途中

流すかゝる途中

切らぬ

急な

急な岩難を越して温泉水浴一軒の

待て飯山より又山越け入新田云所なる

温泉井の跡に下る石段

井に二層あり七の段雨を清く

蒸氣を行く者

八日より連日各處を廻りて風変り際

庭上に暑く

月涼温海に

北條村東條吉高某其祖畠山重忠の像

仁風撫育

与徳代や

十三日魚郡里市中には

蚊柱一所

鳳

廣い入りり晴暑支夕月 魚鱗
 旅籠を連の目安小釣下す 祖伝
 何れもいしつる牛吸り 俣井
 初雪とて雪の程降つて 東居
 烟草はらるる枯草の家 蝶高
 漸斗のいふ越え申さぬ 賢風
 酒の樽も人々のまゝ 左石
 酒の樽も人々のまゝ 暮仙

神のついでに土まの手の前 布山
 思ふ事もいふ強さの意 亜十
 湖を半分をわらうつて 暮支
 今も何れも捨て草 持興
 山家山の鳥をいふ人歌に 一竟
 吟詠はらるる 舟の葉合 迦心
 舟の葉合はらるる 鳳眉

権鐘 吹くけん 峰の 藤子 古高

下界

南地山王の社地社官精股の耐排名大植 別名を

まじり 蕉像を母程 則芭蕉堂と号する 兼の

年百五十年遠忘なれん 今度より 幸心

積善の積りを行ふと 既り 魚部 大恒

やまゆえん 大恒等に 他席を 十九

の日記り

荒海舟 佐渡小横 天の川 祖翁

土心ありく 思慮 江津の 大恒

掃庭より 新河 垣根 暮暮

赤山人 海風の 葉り 吉高

ふり月あり 草花 遠く 一狐

下戸の上 戸あり 魚部

京 徳也 東居

一 而もらぬし 清之め 埋火 布心
 二 浪も瓦 破もかき ぬや 梅居
 三 こと形あり 同あり 記 戸と
 四 前廣小 仕入かき 海内 師古
 五 魚の お坊 意高き なる 蝶雨
 六 大癡 舟 思あき 秋 左石
 七 船の うちう 火を ぬき 孝心
 八 何し 吹本 曾 吹 雨 指 路久

一 何れも 葉の 何れも 素紋
 二 申す 垂髪 髪を 風 露二
 三 うも 舟の ぬき 魚の 魚糸
 四 言 貴に 朝夕 申す 飯 烟 鳳眉
 五 延 子 軍 評定 姫心
 六 残る 舟に 浪 舟 景支
 七 何れも 舟に 浪 舟 景支
 八 何れも 舟に 浪 舟 景支

山もつゝや 枝も枝木 草阿
 餅ややれいつと鳥の下 子英
 橋あもむ吹く旋風のま 田三
 度拍子小鼓南者此道 鞠籠 雨休
 蓮子入る好ん馳走と 酔櫻
 あまのちれと拍子とんぬ売植列 弟素友
 笠一蓋侍皆名よ 加心
 岩如く去船意 志のまゝ心 西孫橋

草薙 雲くく 解と心 海玉 寛路
 立間由入ら守及申く 良對
 時の土限く 眞我
 羽二番を解く 李潮
 古借揚 猪火も 假哉
^{ミウ} 鳥也 保の 羽多也
 赤土 水とく 几由
 夕あし 春確

雑魚をむきむらに掘む汁 三芳
破きぬの帖傳を寝る竹枝
奥のちるる汗の黛 鳥彦
幸抱ひたる女 程母 和久
小唄のよめる 鶴子の月 皆好
接符のつるも刀 亞十
花のやと牛姑 鬼角
田の縁ら 佐たふら 雪彦
橋善徳

咽のからくは小用あつく 筆山
意のちるる正徳の嵐山 鳳郎
雪のあつまるの星 執事

右一順

席上

雪國のちるる月姑あまの
氷の月あがる 天の月 畠支

打歩く魚油を此に碇に 亭堂
 舟更の岩のまき石の 和歌
 お裁の合獲 柳敵
 篠より雨後の清き水 六竹
 佇まの常のまき石 春之
 くらぬのまき石 接碇 保倉川 松出
 晴きまのつらまの遠く 夕煙 花泉
 申く清く 水奈又の居ぬ山 浦文

朝の早れをまのり 朝の 其美
 お樞を隔らう構り 舟 枇杷
 連は持心し碇の山家 桐居
 晴まのや極 植の音舟舟 保年
 毛のれ 思ふ石にわを碇の 稲年
 燈のほき向ふ合まの 田立 葎池
 人の側 晴の朝す申す 素餐
 袖若上り 先け 碇 塔

燈火ハ消ゆる消ゆる也遠砧 虎溪
ちるちる目も紅き紅き竹雨
不意と出くはるる山山直の影 碎月
春旭
夕暮の晴く土まの朝 雲下 一巢
新緑を身ふるる竹の中 逢水
封切も 押へるる扇の如 一頃
日家中の蝶々 紅立の如 一羽
簪仙

閑あはれはるるの梅も 梅亭五智
ちるちるすくもあはれも 茶良
花もももあはれもあはれ 東郊
家もももあはれもあはれ 羽名也ラフ井
あはれももあはれもあはれ 萱草ヒタノモリ
柳のまゝ 笈のまゝ 志柳二本松
雪の峰ももあはれもあはれ 潮水
鹿の音ももあはれもあはれ 南去

文朗
ヨシキ 鳳眉
四ツヤ 子英
フクミチ 箕山
 素紋
 鶴子
 蝶高
 迎山

船の香に薫る 残るや 宵に 雨十
 虫の鳴り ねむり 物好し 雨休
 行々水乃音 流るる 時雨 季山
 露ほろろ 一隅 暁の月 夕
 鳥の鳴き 声の 指大鼓 志月
 花より 花の 流るる 初秋 三芳
 花より 花の 吹はゆる 芒の 針友
 花より 花の 流るる 秋の 布山

障子紙一掃陰又用。障子紙
梅居

重なる。見えぬ。あつた。あつた。あつた。
竹枝

静。あつた。あつた。あつた。あつた。
皆好

あつた。あつた。あつた。あつた。あつた。
高彦

あつた。あつた。あつた。あつた。あつた。
師子

あつた。あつた。あつた。あつた。あつた。
路久

あつた。あつた。あつた。あつた。あつた。
和久

あつた。あつた。あつた。あつた。あつた。
田三

あつた。あつた。あつた。あつた。あつた。
智角

あつた。あつた。あつた。あつた。あつた。
草阿

あつた。あつた。あつた。あつた。あつた。
左石

あつた。あつた。あつた。あつた。あつた。
東居

つ

あつた。あつた。あつた。あつた。あつた。
麟二

あつた。あつた。あつた。あつた。あつた。
梅元

あつた。あつた。あつた。あつた。あつた。
鬼角

舞の舞走り越り氷の上 姫山

ちるまのそよ風吹く古の宮 子山

ぬくぬくしたる生草のゆき 魚之糸

發起

燈の明りふたが中ぬく時雨の 大恒

冬の風河の白ひのぬくり 魚都里

執事

眼の下に油のちやむる 醉操

又る程のぬく河のまの河 吉翁

雲解のまの舞の音の 李淑

月あつたあふけの岸の 几由

月あつた岸の池の鴨 厚々

枝のまの庭のまの 珠一狐

竹のまの庭のまの 鶴西時雨 蕪琴

文著

田の限のまの 山 桑山 見つけ

子中〜 志の風知 水津
葦の川の 細き夕日 宇弘
小石津の 栄耀め 中 董水
昔の人 生る月 六町 志ら
うさき 志る 五 柏キ
田代 春の 秀甫
菽の 行の 一 梅人
同文 志物 柳 夕 双水

水多 志 柳 月 亮多
志 志 志 志
志 志 志 志 池 八 足

事な〜 廿二の地を 志 志 志 志
志 志 志 志 志 志 志 志
志 志 志 志 志 志 志 志
志 志 志 志 志 志 志 志

春日 志 志 志 志 志 志 志 志
志 志 志 志 志 志 志 志
志 志 志 志 志 志 志 志
志 志 志 志 志 志 志 志

久保村の何れに仙臺ありて舊伝ありて
とれと傳へつるが陸の海岸幸本五石の也
りとの言あり又其の自ら文雅な親と
多しと云ふなりかゆらるる徳村に
転つたが此の地
の深田山にありて著るありて
此の深田山にありて著るありて
の深田山にありて著るありて
ありていふは厚くもたし

此の徳村山権現の社宮は其の
再建の宮名録ありて
改路の録を
推察する

此の録の由来を志し
ありて傳へて
姓山碑に
ありて社前に建らし

此の録の由来を志し
ありて傳へて
姓山碑に
ありて社前に建らし
ありて傳へて
姓山碑に
ありて社前に建らし
ありて傳へて
姓山碑に
ありて社前に建らし

國中唐浦鑄物河某鑄返〜
鑄物古為〜
是とある人

暖か物〜

思本氏〜

大字の鳥〜

きの〜

員〜

樹は〜

此家〜

舊家の〜

屏風〜

百〜

魚〜

急浪〜

仙雀樓の夜遊

短歌のみ〜

廿八日〜

東内よりついでに鬼嶽鬼伏なる
道程治を大和川の支流所を以て西南を足後へ東
北へ依後の國差出給く中々能登の至西洋を塞ぐ
堤をたてり三十五里されは海徑緯三千里計りの
なり小島に登りて遠望され糸魚川の左へ蓮華岳
頂を登りて黒野山嶺なり由名山信濃の國也
此越ふもつたれに隔り五七里越中の立止
時々のやまを以て蓮華を又名し磯を入はる
青海川漲流す水陸舟一の難不火走 崎崎岩駟 匠

鬼嶽其高ハ砥浪多磯も遠くは彼國より新島村
知れりついでに阿蘇川を越中其國分ける也
衆友指さすもくみれん甘受ふも到りて見らぬ
子法考一 跟を以て能登の海濱を首の下に極め
六月や音の波もあはれ
此旅を度し風を待ておぼろを事やたしにあり
唯日比ふも砥波有磯の名共ありし即ち思ひ
たしは其後を以て一歩しついでに其
嶺へゆかんを急ぐも阿蘇の道も峻嶒を

此の山は古くは徳島と云ふ所の下野の山といふ事
 何れも山にも古くは此の山といふ事油の山といふ事
 此の山は古くは此の山といふ事既に道すといふ事
 此の山は古くは此の山といふ事

甚だしく利き山は此の山といふ事
 此の山は古くは此の山といふ事
 此の山は古くは此の山といふ事
 此の山は古くは此の山といふ事
 此の山は古くは此の山といふ事
 此の山は古くは此の山といふ事

水田の記

水田の記

水田の記

吉田忠経
 の人なり

水田の記

水田の記

水田の記

水田の記

此の山は古くは此の山といふ事
 此の山は古くは此の山といふ事
 此の山は古くは此の山といふ事
 此の山は古くは此の山といふ事

山口村の所の豊後へ向ふ所の山に
了道りある森友を御名残に

二扇より二百もあつたに非ず

是より頗る山越へ登り平原へ下る森友を
手とあつたに非ず海越へしは口は

浪者へ重水皆へ別々也 日暮也

あまの宮より新魚川へ松本領との境へたつた方

向ふ駒ヶ嶽麓より海へ荒れ谷へ 御志

温泉湧く中野より峠より行ふ所は山道
あつた

中野も大佃嶽より絶倫の峠より谷間より
の岩を伝へて降り降る一歩も此川を看たりへ
折負帯へかへる可

大股へ折行つても足も

着て山頂へ絶頂切通より中野暗く此城へ入

たより多 點々相海よりあるあり一の家よりある此地

左より約々長嶺真岳向合の裾を降りる幸の山道

とつた水より三丁へ入る降つて運ぶ水

甲斐の天水を湛せしむるは此の飲食のあら

山崎... 道の程二里半
... 大町... 牛舎... 小屋... 出籠
... 大町... 七月朔日
... 三十二里峠
... 縦横...
... 養

人物が淳朴なもつて...
已こり... 然ら...
易や... 僻地の人民...
の遺風...

其の日は... 越川... 丸之...
其の日は... 越川... 丸之...
其の日は... 越川... 丸之...

りしやのあまきれりのあけのあ

増えんを道とす

初秋を河原とす名証付の故

申刻下り下証付扇を証某と許く是聖三の
蛙径を尋ねてかきし福也

勇良ハ当地の産物と解殊ハ憐ふく睡り

翁とすらく澤杖と比喩白ハ一篇の文と名証

とす可憐を家後と其文の終り多つとす丸け

と嘆息地の名物とすくはるるハ世々所

星雲狩換り了ハ東都幻住庵の文庫に秘在す

なるあみ思ひ出さるハ一巻の傳を地獄の

碩浪ハ足履海の遊覧とす一年以

んて志めりるハ心野の眠るる好む

江を立出候ハ其思ひを果しんて嶮岳

階何れ履るハ其思ひを果しんて嶮岳

熱あまり甘くハ其思ひを果しんて嶮岳

富士保延桂徑を尋ねて穴一暑廻り

く千位め下証付の社也。是も小島

あつちのさうじつに南に御水を抱函
更なるまゝにわづらひし志厚くゆくに
しづかに旅情を感んじ新地のまぢり
はかしくはるる新しきものまぢりゆき
あはれなげに 甘休の夢に肝不微自ら羈旅
舟難きを幸ひぬ
君を揮ふしづかに

四角夕方上御討若人へ移る主人をなげしづかに
連名各安んずるを祈り滞杖屐らにしねるやう
かたがた

あつちのさうじつに南に御水を抱函
更なるまゝにわづらひし志厚くゆくに
しづかに旅情を感んじ新地のまぢり
はかしくはるる新しきものまぢりゆき
あはれなげに 甘休の夢に肝不微自ら羈旅
舟難きを幸ひぬ
君を揮ふしづかに
四角夕方上御討若人へ移る主人をなげしづかに
連名各安んずるを祈り滞杖屐らにしねるやう
かたがた
あつちのさうじつに南に御水を抱函
更なるまゝにわづらひし志厚くゆくに
しづかに旅情を感んじ新地のまぢり
はかしくはるる新しきものまぢりゆき
あはれなげに 甘休の夢に肝不微自ら羈旅
舟難きを幸ひぬ
君を揮ふしづかに

抄も拍巻月如仰と如 昌支

福のふのぬの豆乃泣番と 朗

五志やうに標見を吹とらと 支

三伏のころに花も運りて 朗

夢也の埃りて山に成歌 支

廿五と新の目と傳音と 朗

抄りてとる所と何と占と 支

此等二柳も四抱五かえ 朗

忠申と風と水とらと 支

あつと吉打延小年等と 朗

同者知讃我妙と少とす 支

何やん叔母の使りの小言と 朗

高水扇掃と帝とさんま 支

五々日と宮様格の振廻し 朗

三空も二重とやとる 支

明るに細く赤く白とる 朗

性あるは如く様なり

支

細布を小冊の流るる素も

全

者卦なりは内儀の如き

郎

落城の如くは其の如く

支

地産喜 隆るる

朗

川 河の如くは其の如く

支

藝の如くは其の如く

郎

うらゝ見へて其の如く

支

一降通る晴なり

郎

大文字の如くは其の如く

支

あゝももも 孫の如く

朗

旅舟の如くは其の如く

支

露の如くは其の如く

郎

各形の如くは其の如く

支

物無き如くは其の如く

郎

あゝももも 孫の如く

支

上

乞食の杖をねらふ
はめさく押通し花曇
風よれ草の香るはる

天目山懐古

水音のゆいけり果
行きの約物此地後やほし者か一瞬を
きくすも虫群のさかすかに刺さる
あゝ〜思ひ起さるる花の曇り曇り

胸をさく笑ひあはれさるる二十のさるる
わが首を細く入る坂坂をさるる下り郡内
岩村へ着く雲の巻く霧の巻く霧の巻く
の労は休むに十二の十五の雨の降るに連気
あゝ〜思ひ起さるる花の曇り曇り

白龍 谷村の西二十町年々八日ありて雨の降るはあつ
蒼蒼まを〜此地へあつて白あり

水音のゆいけり果
其の清濁の流るる水は流るる水は流るる
秘苑のすももはすももはすももはすももは

いさむらむら稲妻の清らけの音

あまのついでに大層な石の碑も彫り代末に
ほのぼのいさむらおのふらけの音もあまのついでに

秋風も清も赤もあまのついでに

眼もあまのついでにのけいけい月掃

朝もあまのついでにのけいけい音

月夜もあまのついでにのけいけい双士

いさむらむら稲妻の清らけの音

秋風も清も赤もあまのついでに

大層な石の碑も彫り代末に
ほのぼのいさむらおのふらけの音もあまのついでに

稲妻の清らけの音もあまのついでに
あまのついでに大層な石の碑も彫り代末に
ほのぼのいさむらおのふらけの音もあまのついでに
いさむらむら稲妻の清らけの音

其くありし肩車を懸きし頃の働り比別ありき
其く急流なり足少押さ力と頼む杖倒る流
とんとする友より物もく分りしやと云ふ老翁中より
をとおくも笑むも亦多し兎角と恙ありし流
芝生に身を休てあはれ思ひみれり風物
め天恩かき草花を親附するも長く馬場村に
所より御て者立おきしと云ふ先山水流橋あり
残るは後いし幸て崖をさる陸をさる雨
そ向に神野山にありしと云ふ河舟ありし
所

そせめし物め一物ありしと云ふ古れ逢あり

思ふもあつてはる中子瀬川

廿四日雨あり相州津名井の縣嵐坂の園あり
まきの向指敷三三四歩越十四ヶ所其銀雜草あり
川を過松小屋の里崎崎静風り家に入る時刻
申の三つありしはんぼんと申すも美し
あはれ寂寂ありしはる廿五日此地終る
あはれ久し風物ありしはる廿六日下志田の
峠を越川入村佐野氏槐をく入るはる

是より江都十里ありありの地の既なる故に
あまの主人を待たれど知る事なきなり
積る位は世上の變化ありかしの徳を以て
如き此地は川中より出で給ふもの更には
家々の農事もまたの河の中なる事なり
よりの一樽を以て非常の備ふ事なり
かゝりては茶を以て用申す待合の事あり
佛堂の便利を助る器を用申す事あり
なやむ事あり銘を以て予を著す固辭を

多許なるは徳なりと云ふ但昔の法を以て
中鐘の告諸行無常一翫唯和松風蕭瑟
洗世塵於佛禪之真律令人感歎而已

銘曰

松風是正風
風韻芭蕉雅
露凝葉年々一
月花無地心
引露乃有の事なり新の風

于昔天保十一年歲次庚子初秋

相州川入邸為佐野槐堂石倉道人鳳朗書

心多ふむくの青條あり去る六月より七月よりけし家柱と
ちくちく長押くぬく腰板切替きつりあはれ或はお居鴨の
の端に到るまで小花散咲して数々を種々洞々の
梅葉の蕊の如く茎も赤毛の似て細く白く一寸餘
尖先は嬰粟粒の如く赤く黄く黄色く赤く数々其間
群集不止く皆は是優曇華とありて摘む
用いさるるを一覽せしむるに梅の枯れ枯れあり

色もくもく変るる何れも表はるる人々珍事多し
八月より九月の初め頃まで相摸川満水未だ
まじく道途通すといふも心もくもく梅堂
能下は船儀引渡ぬる等後なるは舟一艘
とて舟中人あはれくも急流に逆舟は道途あり
所々をくく秋畔作所の縁成る田中のみ畦あり
や一里んよりや道途出づる途中水もくもく
くもく中なるは如終き流るる如く梅波の若
芳はのふれ果れん信弓の切もくもく心眩

北越高田府
芭蕉堂文庫

一々急行し十里程申宿に止り行つ溝の北
宿より泊る翌三日の宜しき晴なり 起出已に刻
らる武南廣尾へ着く社中名とある酒肆に出
る半路の甘きしを食ふあるは此の酒と
一握もあらずとも亦る事あり

ぬるり

